

日本イギリス哲学会関東部会 第104回研究例会

日時 2019年12月7日(土) 14:00~17:15

場所 東洋大学白山キャンパス 2号館3階第一会議室

プログラム

14:00~15:30

バーリンとその批判的継承者グレイによるヒュームの人間本性論批判
—ヒュームの人間本性の多様性をめぐって—

渡邊 弘明 (国際基督教大学・院)

15:45~17:15

アダム・ファーガスン研究の最近の動向と傾向

青木 裕子 (武蔵野大学)

終了後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。
また、来年度7月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し
出ください。

関東部会担当 太子堂正称 (taishido[at]toyo.jp)

矢嶋直規 (yajima[at]iccu.ac.jp)

*[at]を@に変えて下さい

日本イギリス哲学会関東部会第 104 回例会 (2019 年 12 月 7 日、東洋大学)

【報告要旨】

バーリンとその批判的継承者グレイによるヒュームの人間本性論批判
ーヒュームの人間本性の多様性をめぐってー

渡邊 弘明 (国際基督教大学・院)

バーリンにとって、ヒュームはスコットランド「啓蒙」主義を代表する思想家であり、彼の懐疑主義はいわゆる「対抗的啓蒙」の文脈でも理解される論争的な思想家である。バーリンの親友で、20 世紀英語圏において価値多元的主義的とされる思想の重要な源泉と見なされているスチュアート・ハンプシャーはバーリンの哲学をヒューム主義と捉えるのに対して、ジョン・グレイはバーリンの見解とヒュームの自然主義とに関する認識の違いを強調している。ヒュームは、グレイによると、人間本性を固定的なものと理解しており、歴史的に変容しうるものと捉えてはいない。この点でヒュームとバーリンとは異なる認識論的カテゴリーを形成している。それは人間本性の原理と、原則として、さまざま異なる形式の原理を導く環境とその偶発性とを区別していない。本研究の目的は、ヒュームが歴史的に条件付けられた多様な人間本性をいかに認識していたのかを検討することにある。

以下 3 つの論点を記す。第一に、バーリンはヒュームの思想を「啓蒙」あるいはそれと競合する「対抗的啓蒙」のいずれの潮流において理解しているのかを検討する。バーリンはヒュームの懐疑論に啓蒙の自己論駁的な要素を見出すが、一方でバーリンの思想全体から見た場合、グレイが指摘するように、ヒュームの人間本性論はバーリンの多元論と対立する固定化された特徴をもっている。第二に、ヒュームの人間本性論における一般原則がいかなる意味で固定化された人間本性と言えるのかを考察し、グレイによるヒュームの人間本性論の解釈を批判的に検討する。人間のもっとも基本的な性質と文明以前の環境との偶然性は、ヒュームにおいて社会に見られるおよそ普遍的な実際的な必要性に根拠を与えている。その結果、人間本性の多様性を排除していない。第三に、グレイによるヒュームの徳の構成に関する普遍的な基準の議論と上記二で示した人間と社会の相互作用による自己創造を基礎とするヒュームの人間本性の多元性は、実体的な自己の選択を通じた「自己創造」や「自己変容」とは関係がないとの批判を検討する。ヒュームの人間本性の概念は、グレイや他の論者の見解以上に柔軟であり、偶然性をはらむ歴史の変化のもとで人間が多元的な道徳的共同体に適応することができる。彼の自我の観念は道徳的な同一性自体が文化的・歴史的な変化の影響を受けやすいものであることを示す。

アダム・ファーガソン研究の最近の動向と傾向

青木 裕子（武蔵野大学）

近年、アダム・ファーガソンの思想を主題とする研究書が、ハーバード大学出版会とエディンバラ大学出版会から出版された（Iain McDaniel (2013) *Adam Ferguson in the Scottish Enlightenment: The Roman Past and Europe's Future*, Harvard University Press; Craig Smith (2019) *Adam Ferguson and the Idea of Civil Society: Moral Science in the Scottish Enlightenment* (Edinburgh Studies in Scottish Philosophy), Edinburgh University Press.)。

古典的共和主義やシヴィック・ヒューマニズムとファーガソンを結びつけた 2000 年代に見られたファーガソン研究とは異なり、2010 年代のこれらのファーガソン研究は、より多面的に、しかもより深くファーガソンの思想を理解しようとしている。共和主義者、自由主義者等のラベル貼りでは括り切れないファーガソンをどのようにして統合的に理解するかという問題に、ファーガソン研究は益々直面しているように思われる。2019 年 7 月 14 日から 19 日にイギリスのエディンバラ大学で開催された The International Society for Eighteenth-Century Studies の ISECS International Congress におけるファーガソンに関する研究報告にもそのような傾向が見られたと思う。また、ファーガソンへの関心は高まっているように思われる。

本報告では、近年のファーガソン研究についてその動向と傾向をまとめ、その意義について考えたい。

【会場案内】 東洋大学白山キャンパス



- ・都営地下鉄三田線白山駅
「正門・南門」A3 出口より徒歩 5 分
「西門」A1 出口より徒歩 5 分
- ・東京メトロ南北線本駒込駅
「正門・南門」1 番出口より徒歩 5 分

*会場は 2 号館 3 階 です (16 階建ての一番高い建物です)。都営三田線白山駅から A3 出口 を出て 南門 からキャンパスに入られるとスムーズです。

A1 出口から出られた場合は、6 号館にお入りいただき、その建物を通り切ったところにエレベーターがございますので、それを上がっていただくと 2 号館に到着いたします。

正門から入られた場合は、階段を上って真っ直ぐ進んでください。前方左手に 2 号館があります。京北門は閉じておりますのでご注意ください。